

ポストリーディングの指導
—スピーキング力の向上につなげるオーラルサマリー—

千葉県立〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇〇

1 研究の背景と目的

「コミュニケーションの能力の育成」が英語教育の目標であり、それはまた社会が要求するところでもある。「英語Ⅰ」や「英語Ⅱ」はもちろん、「リーディング」や「ライティング」の科目であってもこの目標に到達すべく、努力を重ねている。しかし科目の枠にとらわれ、「リーディング」では読むこと、「ライティング」では書くことに重点をおくあまり、話す、聞くといった他の技能をおろそかにしてしまうこともある。実際のコミュニケーションでは、読む、書く、聞く、話すの4技能が関わり合ってコミュニケーションが成り立っている。教室でも実際のコミュニケーション場面と近い環境にして、4技能をバランス良く、統合して指導すれば、コミュニケーション能力の育成という目標に達することが期待できる。4技能のうちの読む、話すの技能を関連させた授業計画を立て、読んだ情報に基づき、内容を再構築して発表するというスピーキング活動を通じて、コミュニケーション能力を育成することができると考え、本研究のテーマとして設定した。

2 研究仮説

英語で話をしたくても困難を感じている生徒は多いと思われる。それは、英語を話す機会が少ないことが原因の1つである。スピーキング力を育てるためには、実際に話す経験を積まなければならない。限られた時間でできるだけ多く話す機会を与える必要がある。そこで、リーディングで得た情報を相手に伝える活動をスピーキングで行えば、コミュニケーション能力の向上が期待できると考え、以下を本研究の仮説とする。

2.1 研究仮説1

パラグラフの構造を理解しトピックやキーワードに着目して相手に伝える練習を積み重ねれば、読んだ英文の要点を伝えるスピーキング力が向上するだろう。

3 研究方法

3.1 事前調査

- ・ 文献研究

3.2 授業実践

- ・ 読んだ情報の要点に気づく指導
- ・ 読んだ情報の要点を英語で相手に伝える指導
- ・ 読んだ情報の要点を自分の言葉で相手に伝える指導

3.3 検証方法

研究開始時と研究途中と終了時に実用英語技能検定の英文を使って、読んだ英文の要点を相手に伝える力の変化を測る。発話の量と質の比較をする。

4 研究内容

4.1 文献研究

高橋・高梨(1984)によると、Kaplan(1964)は言語ごとに特有の論理展開が存在することを明らかにした。英語系の人にはパラグラフの冒頭に **Topic Sentences** (中心文・話題文) を持ってきて、それに続く文 (**Supporting sentences**) でトピックを展開させるというストレート論理展開になることが多い。一方、日本人は、肝心なことが最後になる渦巻き型の論理展開を好むと指摘した。このことから英文を理解するにはこの英文特有の論理展開を知り、慣れることが必要である。

また、Swain(1985)はアウトプット仮説(**the Output Hypothesis**)の中で、理解可能なインプットに合わせて、理解可能なアウトプットが言語習得にとって必要であると述べている。

以上のことから、英文特有の論理展開を習得し、理解できた情報(インプット)を、話すというアウトプットをする授業を通して、スピーキング力を伸ばす指導法を目指したい。

4.2 読んだ情報の要点に気付くための指導

ア パラグラフの構成、トピックセンテンスについて説明する。

イ 英文を読んでトピックセンテンス、キーワードを挙げる。

ウ 1つのレッスン終了時に、トピックセンテンスのみを集めたシートを読む。さらにそれを厳選する。

エ 厳選したトピックセンテンスを使ってサマリーテリングできるように個人個人で英語を話してみる。

4.3 読んだ情報の要点を口頭で相手に伝えるための指導

要約文を完成させてサマリーテリングする。

ア 黒板に書いたキーワードを手がかりに、内容を再生する。

教師が板書しておいたキーワードを使ってモデルを示す。キーワードだけを見て、教師についてリピートさせたりする。

イ フレーズやセンテンスの穴埋め

キーフレーズやキーセンテンスが抜いてある要約を読み、それを完成させる。

ウ キーワードの穴埋め

キーワードが抜いてある要約を読み、それを完成させる。

エ 発音やイントネーションの復習

出来上がった要約文を使ってまずは読む練習をする。次に文の中での強弱、スピードなどの注意点を説明しながら、教師がモデルを示す。その後、個人で練習させる。ペアによる活動を基本とし、必要に応じて全体指導を行う。

オ read and look up による練習

英文をできるだけ見ないで言えるように練習する。

4.4 読んだ情報の要点を自分の言葉で相手に伝える指導

ア 本文内容に関する英語の質問を生徒が口頭で答える。教師は答えを黒板に書く。それを元に内容を話す。教師がモデルを示す。それをリピートする。書かせずに、個人個人で言ってみる。

イ 5W1Hを標準とした質問の答えを考えることから、サマリーテリングする時に有効なフローチャート、キーワード、ピクチャーなどを作る。

ウ 生徒はペアで異なる英文を課題として持ち帰り、サマリーテリングできるようにキーワー

ドや、フローチャートをそれぞれが書いてくる。

エ 次の授業時に作成したシートを元にサマリーテリングする。すべてきちんとさえなくてもいいこと、要点が伝わればいいことなどを説明する。

4.5 検証方法

検証テスト1： 実用英語技能検定4級の文章題を読み、概要を話す。問題文を見ながら話す。ICレコーダー2台で録音する。

検証テスト2, 3：実用英語技能検定4級の文章題を読み、概要を話す。問題文は見ないでメモしたキーワードやキーフレーズを見ながら話す。コンピュータで録音する。

録音したスピーキングを次の評価基準に基づいて10点満点で評価しその変遷を考察する。

評価基準は Standard Speaking Test (小池 2004) の到達基準を参考にした。

表1 評価基準

点数	内容のわかりやすさ (4点)	内容の正確さ (3点)	流暢さ・発音 (3点)
1	語や句が中心。または問題文をそのまま読んでいる。	キーワードやキーフレーズがほとんど入っていない。	日本語の影響が大きく、長いポーズがあったり、反復が多い。
2	語や句が中心。自分なりにまとめている部分もある。	キーワードやキーフレーズがほぼ入っている。全部入っていたとしても内容にずれがある。	日本語の影響が大きい。理解不可能ではない。
3	自分なりにまとめてセンテンスで話しているが、誤りも多い。	キーワードやキーフレーズが全て入っていて、内容にずれはない。	ほとんどスムーズに話せる。日本語の影響は少ない。
4	自分なりにまとめて、正しいセンテンスで話している。		

5 研究計画

5.1 対象生徒

平成21年度	3年生3クラス
平成22年度	1年生2クラス(実験群) 1年生2クラス(統制群)

5.2 科目及び教科書

平成21年度	「リーディング」3単位 MAINSTREAM Reading Course 増進堂
平成22年度	「英語I」 3単位 MAINSTREAM English Course I 増進堂

5.3 指導計画

平成21年6月～10月	文献研究
平成21年11月～平成22年1月	授業実践① パラグラフの構成の学習・キーワードを元に内容再生

平成 22 年 4 月～10 月	授業実践②および検証 要点に気づく・要点を相手に伝える・自分の言葉で要点を伝える 検証テスト（5月，7月，10月）
------------------	---

6 研究実践

6.1 読んだ情報の要点に気づき，英語で相手に伝える指導実践

6.1.1 トピック・センテンスを使って話す

概要や要点を把握するためにはトピック・センテンスを探すことが大事である。生徒達はトピック・センテンス「パラグラフの中で核となる文」を探す活動を通じて，パラグラフに対する認識を高める。つまり，パラグラフの中から1文のみを選ばせることで，トピック・センテンス以外がサポーター・センテンスであり，具体例や説明であること，そして，パラグラフは意味のひとかたまりであることを学ぶ。

1. 次の英文を読みトピック・センテンスに下線を引く。

Gestures are a useful means of communication. For instance, a visitor may ask you in English how to get to the nearest post office. If you cannot answer in English, you can point in the right direction with your finger. In this way, gestures can be a helpful international language.

But you must remember that gestures can mean different things to different people. If they are not used carefully, misunderstandings can occur.

2. トピック・センテンスに出てくるキーワードを板書する。

Gestures	useful		
		mean different things	different people

3. 生徒は黒板を見ながら内容を話す。

6.1.2 黒板に書いたキーワードを元に，内容を再生する。

1. 生徒にハンドアウト1を配付し要点に注目できるようにする。

ハンドアウト1

1. There is a rumor about the archipelago. What is the rumor?

2. Is the rumor true?

3. What is the average age at death in Okinawa?

2. 黒板に答えのキーワードを板書する。

1. Rumor about the archipelago→Home to the longest living people in the world.

2. True.

3. Okinawa→81.2 years. (Westerners→76)

3. 教師がモデルを示す。

There is a rumor about the archipelago. Archipelago is the home to the longest living people in the world. The rumor is true. The average age at death in Okinawa is 81.2 years old.

4. 生徒が黒板を見ながら，内容を話す。

6.1.3 ペアでお互いのスピーキングを聞く。

1. QA を口頭で行いながら復習する。
2. その答えを元にした要約文（ハンドアウト2）を配付する。
3. 生徒は **Opponent** か **Supporter** のうちいずれかを選び、それを声に出して話せるように練習する。
4. キーワードやキーフレーズが抜いてあるプリント（ハンドアウト3）を配付し、それを見ながらサマリーテリグできるように5分練習する。
5. IC レコーダー2台を使って生徒の発話を録音する。
6. 優秀なものを聞かせて、発音やイントネーションの練習に役立てる。

ハンドアウト2

Summary Lesson 9

Please practice speaking English.

Opponent

Some people oppose the death penalty. There are two reasons. First, executions are inhumane. Second, we should give every criminal a chance to be rehabilitated.

Supporter

Some people are in favor of the death penalty. There are two reasons. First, the death penalty deters people from committing violent crimes. Second, it ensures that murderers receive a punishment that matches their crimes.

ハンドアウト3

Tell your friends

Please tell your friends the outline of Lesson 9.

Opponent

Some people _____. There are _____. First, _____. Second, we should _____ to be rehabilitated.

Supporter

Some people _____. There are _____. First, the death penalty _____ committing violent crimes. Second, it ensures that _____ that matches their crimes.

6.2 読んだ情報の要点を自分の言葉で相手に伝える指導実践

6.2.1 絵を見ながら話す

文字でつかんだ情報を絵を使って再生することで、話そうとする気持ちを活性化させる。

1. 英文を読み、概要を把握するための並べ替えの問題（ハンドアウト4）を行う。
2. 絵を見てサマリーテリグできるようにキーワードやキーフレーズを書き込む。
3. ペアワークでサマリーテリグを行う。

ハンドアウト 4

- ①年配の男の人が店の奥から出てきた。
- ②私はほっとした。
- ③元のドラッグストアに行った。
- ④彼は顔の前で手を振った。
- ⑤私はのどがとても痛くなった。
- ⑥はちみつ入り紅茶を飲んだ。
- ⑦店を出た。
- ⑧店の中で薬を探して回った。
- ⑨のどに触った。
- ⑩ “Do you have anything for a sore throat?” と言った。

⑪私は怒った。

並べ替え

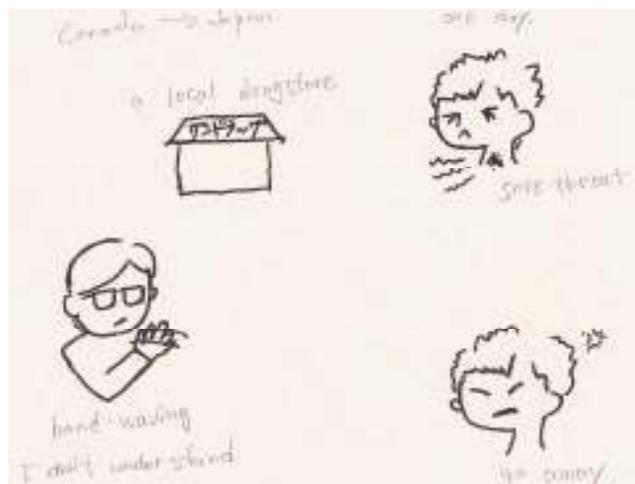
→ → → →
 → → → →
 → →

Class No. Name

Tell your friends the story of Part 2

Task 1 Read Part2. What's the story about?

Task 2 Write the key words and phrases.



Task 3 Practice by yourselves.

Task 4 Tell your friends the story.

Task 5 Evaluation!

Pass this sheet to your partner. Have him evaluate.

- 1. Excellent (すらすらと話せた)
- 2. Good (つかえながらも話せた)
- 3. Practice harder (もっと練習が必要)

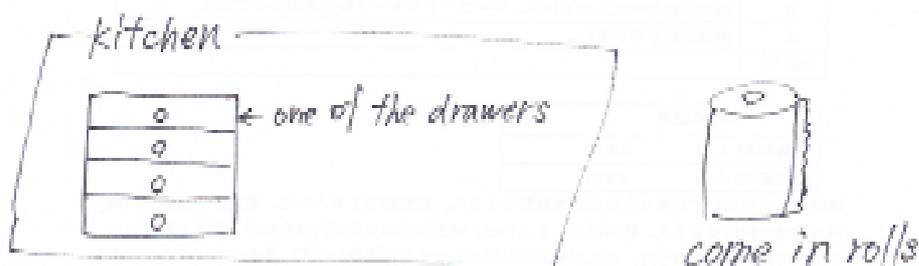
Class No. Name

6.2.2 本文の内容に関する質問の答えを元に話す。

英語で質問し、その答えを視覚的にとらえて理解できるように、英語だけでなく、絵や図も使う。

Question 1. Where is kitchen paper?
 2. How are paper towels sold?

Kitchen paper paper towels



黒板を見ながら生徒は Kitchen paper is in the kitchen. It is in the one of the drawers. But correct term in English is paper towels. Paper towels are sold (come) in rolls. と、質問の答えを用い、黒板の絵もヒントとしながら英語を話す練習をする。次も図を使った実践例である。英語で内容に関する質問をしながら黒板にはキーワードやキーフレーズを書き添えていく。

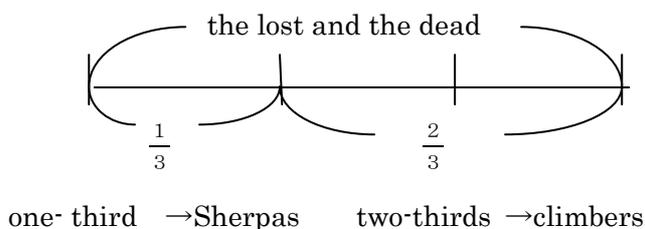
- Question
1. Why did Noguchi set up a fund?
 2. What is Sherpa's job?
 3. What is the rate of the lost and dead Sherpas?

黒板

A fund → support *Sherpas*



help climbers



生徒は黒板を見ながら教師の後をリピートする。Noguchi set up a fund to support Sherpas. They help climbers to climb Mt. Everest. One-third of the lost and the dead in Mt Everest is Sherpa. 個人で練習したり、ペアでお互いの英語を聞き合う。各パートの終わりのポスターリーディング活動としてサマリーテリングを行う。

また、各レッスンの終わりでは、まとまった量の英文を読み（ハンドアウト5）、トピック・センテンスに下線を引き、キーワードやキーフレーズを抜き出してサマリーテリングする。そしてペアで互いに聞き合ってコメントを書く、といった活動を行った。

Tell your friends the story of Part 3,4

In 2000, Noguchi organized the Qomolangma Cleanup Expedition and collected 1.5 tons of garbage from Mt. Everest. The following year, he formed a larger group of climbers with a four-year plan to collect more garbage. It was hard, of course, physically, as they had to work in 8,000-meter-high areas. Not only that, Noguchi had to find sponsors to support them.

After Mt. Everest, he planned to clean up Mt. Fuji. By then, it had already become famous for its trash. "Can you believe that it's the only mountain in the world with vending machines on the summit?" he asks. He created a slogan: "If we can change Mt. Fuji, we can change Japan."

In 2002, Noguchi set up a fund to support Nepal's Sherpas who help climbers to reach the top of Mt. Everest. While one-third of the lost and the dead around Mt. Everest are said to be Sherpas, they continue to help climbers to make a living. Noguchi planned to use the fund to support the families of Sherpas lost in the mountains. He says, "We have to take social responsibility for those Sherpas. We can't dispose of nature. We can't dispose of people."

TASK 1 Underline the topic sentences of each paragraph.

(各段落の中心となる文)

TASK 2 Write 10 key words.

TASK 3 Tell your friends the story. But you can look at the key words only.

Your partner's comments

Name :

Class

No.

Name

7 研究評価

7.1 検証テスト1 (平成 22 年 5 月)

実験群 2 クラスと統制群 2 クラスを対象にして、英語を読んでその内容を伝える力を IC レコーダー 2 台で測った。制限時間は 1 分以内で、実用英語技能検定 4 級の長文読解問題を使用した。

7.1.1 検証方法

- ① ペアで A, B を決めて、A と B は内容の異なるプリントを持つ。
- ② 5 分間英文を読み、キーワードやキーフレーズに下線を引く。

- ③A が B に自分の読んだ話を英語で話し， B は A の話を聞き， 要点を日本語で書き取る。
- ④A と B の役割を交代する。
- ⑤教師は録音していく。

7.2 検証テスト2 (22年7月)

コンピュータの録音機能を使ってテストした。制限時間は1分以内で， 実用英語技能検定4級の長文読解問題を使用した。

7.2.1 検証テスト方法

- ①ペアで A, B を決めて， A と B は内容の異なるプリントを持つ。
- ②5分間英文を読み， キーワードやキープレーズをプリントの裏に書く。
- ③プリントの裏のキーワードやキープレーズを見ながら， 1分間で話しをまとめられるように練習する。
- ④A は自分のスピーキングを録音し， B は A の話を聞き， 要点を日本語で書き取る。
- ⑤A と B の役割を交代する。

7.3 検証テスト3(22年10月)

検証テスト2と同じ方法で行った。

7.4 検証テストの結果と分析

表1の評価観点に基づいて採点した。

表2 検証テスト平均点

	検証テスト1 (5月)	検証テスト2 (7月)	検証テスト3 (10月)
実験群 73人	4.6	4.3	5.0
統制群 79人	4.3	4.0	4.3

統制群がテスト1とテスト3で平均点の変化が無かったのに対し， 実験群では得点が上昇した。特に， 実験群では， 文法的な誤りは認められるものの， 自分の言葉で話そうとして内容が分かりやすくなった。本文中の単語を， 話の流れに沿って言い換えることが出来た。またキーワードやキープレーズの選択やメモの取り方においても実験群の方が優れていた。実験群ではフローチャートを書いてまとめている生徒も見られた。

テスト1ではICレコーダー2台で測定したが， 最初の生徒から最後の生徒まで測定を終えるのに25分ほどかかってしまい， 練習時間に差が出たり， テストを終了した生徒の扱いなどうまくいかないことが多かった。また， 本文を見ながら話しても良いという指示を出したので， 自分の言葉ではなく本文を読んでしまった生徒が多かった。0点が多かったのはこのためである。

テスト2とテスト3では， 1回目の課題を踏まえて方法を改善したので， ほぼ全文を話すという生徒は少なくなった。表5で比較すると， 実験群では2点を取った生徒が， 統制群と比べて4分の1と非常に少ない。また， 7点の生徒は統制群と比較して2倍多い。このことから， 英語をそもそも苦手としている生徒にとっても， 英語を比較的得意としている生徒にとっても， オーラルサマリーが， 内容を理解し， それを表現する点で効果的であったことがうかがえる。また， 流暢さ・発音の点では実験群・統制群ともに目立った変化はなかった。生徒を個々に見ると， 内容をわかりやすく説明出来るようになった生徒は流暢さ・発音においても力をつけていた。

テスト2において実験群・統制群ともに平均点が下がったのは， テスト英文の中のキーワード

が生徒にとっては難しく，テスト1よりテスト2の方が難易度の高い英文になっていたことが原因と考えられる。

表3 検証テスト平均点推移

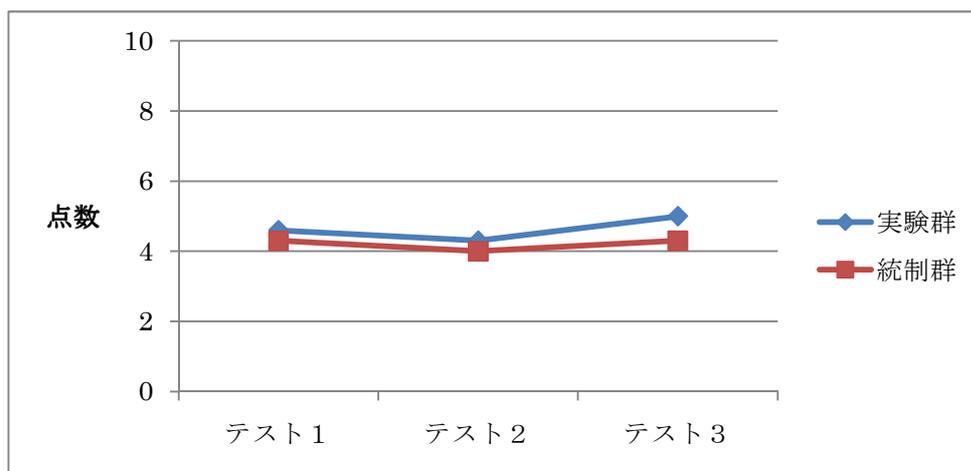


表4 検証テスト1の得点

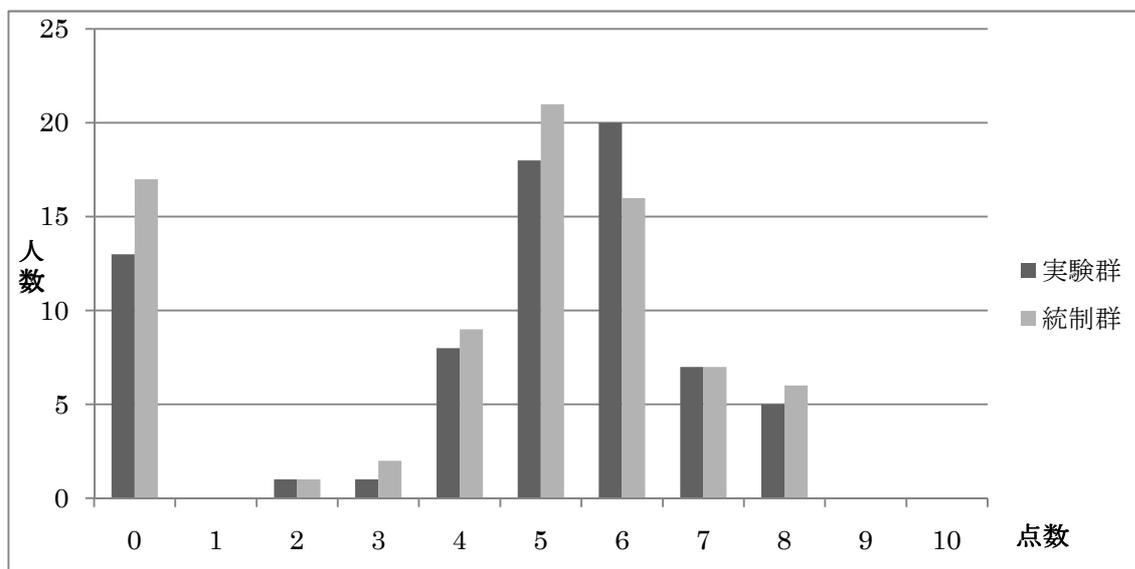
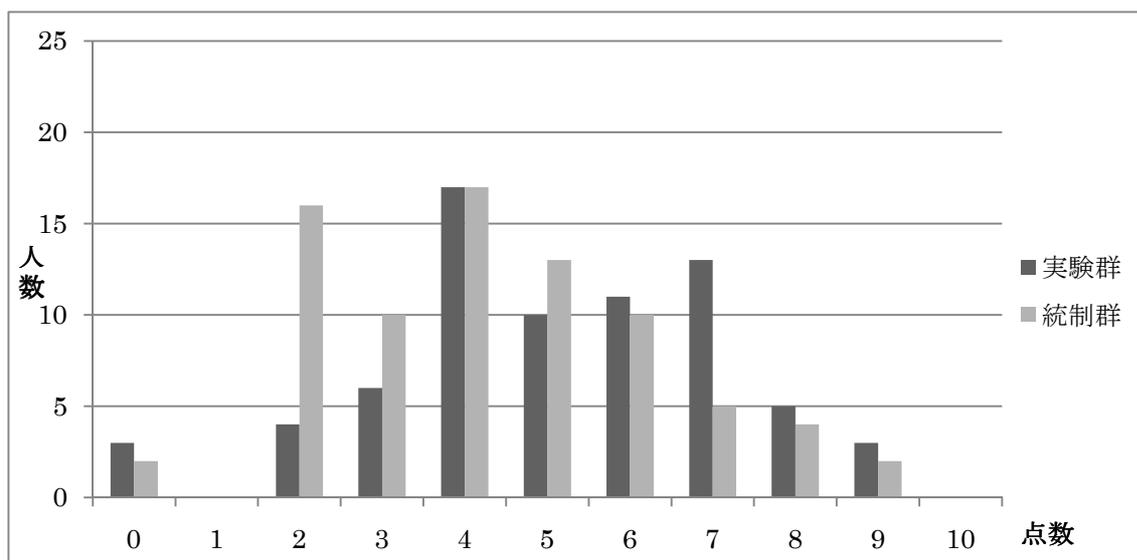


表5 検証テスト3の得点

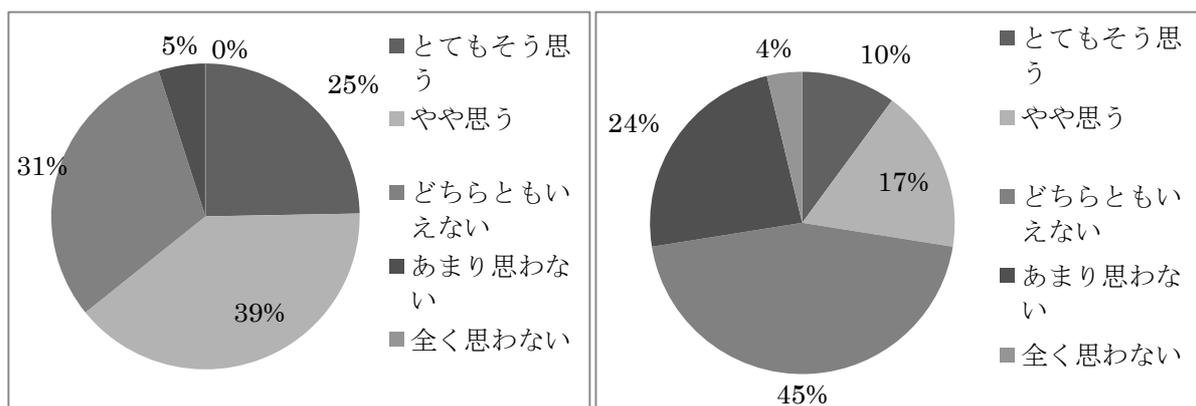


7.4 オーラルサマリーに関する生徒意識調査

検証テスト3の終了後にオーラルサマリーに関して生徒の意識調査を行った。

図1 読んだ英文の内容の理解が深まった

図2 英語を話すことに自信が持てるようになった



調査の結果、オーラルサマリーを行ったことで英文の内容の理解が深まったと答えた生徒が64%に達した。読んだ英文を自分の言葉で再構成して話す活動が、生徒の英文理解を助けていると言える。一方、英語を話す自信につながっていると感じている生徒は27%にとどまっており、オーラルサマリーが、生徒のスピーキング力を向上させているとは生徒が認識していない状況がうかがえる。ただ、英語を話すことは好きかという問いに対しては45%が好きだと回答しており、スピーキング力向上への意欲は高いと思われる。

自由記述のアンケートでは「英語を話すことで発音だけでなく、単語も覚えられる。」「オーラルサマリーをやって英文の意味が分かり、重要どころも分かってきた。」「英文を読むのが早くなった。」など、英語の内容理解に関してオーラルサマリーが有効である記述が多くあった。スピーキングについては、「スピーキングの難しさを痛感した。」「英文を読むのは好きだけれど、話すのはやはり難しいと思った。」など、図2の結果を裏付ける記述が多かった。このようにスピーキングに困難を感じている生徒は多いが、授業に関しては「英語を話すことは難しいが、楽しく身が入る。」や「英語を話せるようになりたいので、このような授業は楽しい。」「オーラルサマリーをやって英文を読むことが楽しくなったし、好きになった。」と肯定的な感想もあった。

8 結論

表2・表3で示したように実験群のスピーキング力に向上が見られた。しかし、第1回目の検証テストと後の2回のテストの方法が異なるため、この数字に対して疑問もあるだろう。そこで同じ方法で行ったテストで比較した表4・表5を見ると、明らかに実験群と統制群では有意な差があると言える。このことから、パラグラフの構造を理解しトピックやキーワードに着目して相手に伝える練習を積み重ねれば、読んだ英文の要点を伝えるスピーキング力が向上するだろうという仮説は支持された。

本研究では、スピーキング力の向上を目指した指導をしてきたが、図2が示すとおり生徒はそれを実感できてはいない。しかし多くの生徒が内容の理解が深まったと感じている。オーラルサマリーがポストリーディング活動として授業に加わることで、生徒はただ読むだけでなく、内容をまとめながら読み進めるという波及効果も生まれていたことが分かった。リーディングの間にスピーキングの活動への準備をすることが、読みの集中力を高め、結果的に内容の理解につながったと考えられる。

今後の課題として、生徒が英語を話すことに自信を持ち、積極的にコミュニケーションをとろうとする力をつける授業をさらに深く研究していく必要がある。話すテストは被験者にかなりの緊張を与えていた。あまりに緊張してしまい、実力を発揮できない生徒もいた。この緊張を軽減し、自信を持って英語を話すようになるには、どのような活動を授業に組み入れるのが効果的かという研究が必要であろう。

参考文献

- Ellis, R *The Study of Second Language Acquisition* (1994) Oxford University Press [金子朝子(抄訳)(1994)『第二言語習得序説』研究社]
- 樋口忠彦 緑川日出子 高橋一幸 編『すぐれた英語授業実践—よりよい授業づくりのために—』(2007)
- Kaplan, A *The conduct of inquiry: Methodology for behavioral science* (1964) Chandler Publishing Company
- 小池生夫 編 『第二言語習得研究の現在—これからの外国語教育への視点—』(2004) 大修館書店
- 斎藤栄二 『英文和訳から直読直解への指導』(1996) 研究社
- Swain, M. Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development, in Gass, S. & Madden, C. (eds.) *Input in Second Language Acquisition*, 235-253 (1985) Newbury House
- 高梨庸雄・高橋正夫 『英語リーディング指導の基礎』(1987) 研究社